北からの発信

アーバン・ルーラル北海道⑤

大雪カントリーサロンに集う人々

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、中高年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

北海道の屋根「大雪山系」を遠望する町々では、その景観に魅せられて移住してきた多くの都会人に出会うことができる。彼・彼女たちの、出身地も職業も移住の理由も区々であるが、共通していえることは、決して都会での生活に疲れ果てて、とか、戦いに敗れてとか、という理由でここに移り住んできたわけではなく、この地での美しい景観と農的な暮らしに夢を抱いてやって来たという点である。もちろん、現実は厳しいし、必ずしも当初の思惑どおりの生活を享受できているわけではないが、自らの工夫と努力と地域社会の協力によって、充実した生活を送っている。また、そんな彼らを受け入れた地域社会の側でも、さまざまな変化が起こりつつあり、新しいタイプの地域住民が出始めている点も見過ごしできない。

本稿では、これら移住者と地域住民の交流の場として、２００４年以来活動している大雪カントリーライフ研究会にスポットを当て、そこに集まる人々と地域社会について紹介しましょう。

大雪カントリーライフ研究会

どこでも農業を取り巻く環境は厳しい。美しい景観を誇る大雪山系の周辺市町村でも、景観の重要な要素である丘陵地に耕作放棄地が広がりつつある。その一方で、美しい景観に魅せられてここに住みたいという移住希望者は後を絶たない。現に、丘のそこここに比較的新しいしょうしゃな住宅を建てて、既に移住して来ている人も多い。その生活の態様も、ペンションやレストランを開業している人、農作業に汗を流している人、カメラやカンバスを抱えて飛び回っている人などなど、実に多彩である。そして、これらの人々は、これまで地域社会にはなかった技術や人的ネットワークを持っているのだ。地元の行政関係者たちは、当然、この移住者のパワーを疲弊する農村の再生に活用したいと考え、また、移住者たちも新たな人間関係を求めている、そんな両者の気持ちを集約する形で生まれたのが大雪カントリーライフ研究会である。旭川大学大学院の梅谷俊一郎教授を座長に、農業者、教育者、年金生活者、建築家、IT関係者、ジャーナリスト、行政関係者など、地域の内外、地元民・移住者の枠を超えた30名ほどのメンバーを擁し、新しい農村社会、農村生活の具体像を求めて研究を行なっている。足掛け3年に渡って月1回程度、土曜日の昼に開かれるサロンが既に20数回も行なわれているのは、メンバー間の話が楽しいからにほかならない。座長の梅谷先生からして、東京出身で海外での生活も長く、旭川大学に職を得て生活しているうちに、すっかり大雪の景観・環境にのめり込んで、森の中に不便を承知で広壮なログハウス風住宅を建てて暮らしておられる。このほか、大阪でご夫婦で教員をされていたが、自然に囲まれながら自給自足的な生活を求めて、高齢のお母さん、お子さんたち兵々ご一家で移住された小嶋源一さんご夫妻。さらに、福岡出身で建築士として働いた後、旭川市に職を得て転居、そこでカナダ人の職人さんと結婚して鷹栖町の農家住宅に20頭以上の犬と暮し、冬は犬ゾリを楽しんでいる村上京子さんなどなど、何日話を聴いても興趣が尽きない面々がそろっている。

大雪カントリーサロン

月に1回のペースで開かれるサロンは、毎回開催場所を移しながら、その場所場所の産品を特別に調理して出される定価千円なりの地産池消弁当が参加の楽しみにもなっている。こんな楽しいサロンを裏で支えているのが、旭川市役所の長谷川寛治さん、東川町役場の杉山昌次さんだ。長谷川さんは中央省庁への出向経験もある職員で、幅広い人脈を生かしながらサロンを支えている。杉山さんは農村移住のカリスマ的存在で、多くの都会人が杉山さんの助言のもとで移住を果たしている。杉山さん自身も農的生活を楽しんでいて、杉山さんのお父さんが栽培し、杉山さんが打ったそばはメンバーの絶賛の的になっている。また、サロンには時々ゲストが訪れる。先日は、当麻町でバラ栽培をしている三田琢磨さん、土井清司さんからお話をうかがった。お二人は大阪の出身。高校時代からの友人で、それぞれ別の会社に勤めていたが、一緒にビジネスをやりたいとの希望から農業に着目。インターネットなどで詳細な情報を集めたうえで移住し就農している。「大雪のバラ」というブランドで、ビジネスとしての農業に情熱を燃やしている二人と、花卉市場の現状や農業・農村問題について議論した後、一面にバラで覆いつくされた大型ハウスを見学した。このほか、一昨年には道内視察の途上で立ち寄ったソルボンヌ大学総長で世界的な人文地理学者J・R・ピットさんから、農業生産と農村景観についての講義を受けるなど大変ぜいたくな時間を共有することもあった。

もう一つ、このサロンを支えている重要な要素に、㈶北海道地域総合振興機構（はまなす財団）が提供するメンバー専用ブログがある。メンバーへのお知らせ、会場への詳しい地図、会議資料、写真等が行き来し、情報連絡の緊密化、メンバー相互の情報のやり取りに威力を発揮している。例えば、写真を趣味とする元ジャーナリスト氏が、掲示板上で青サギの目撃情報を募ったところ、たちまちのうちに多数の情報が寄せられ、見事な写真の撮影に成功したということもあった。しかしながら、北海道のブロードバンド環境は遅れており、中にはテレビも観られない地域もあるなど、今後地方への都市住民の還流を本格化させるためには、一刻も早いその整備が求められている。

変わる農村／新しい農業者

人口が少なく市街地から離れている北海道の農村で、快適に暮していくためには、地域コミュニティの支援が不可欠である。人間関係が希薄な都市生活に慣れてしまうと、濃密な農村コミュニティにはややおっくうな感じを持つかも知れないが、実際には、これなしには生活していけないし、時には生死にかかわることもあり得るのだ。そのため、研究会では近所づきあいのポイントを、「移住者は地域では新参者であることを自覚して、地域との付き合いは徹底的にすること」としている。具体的には、引越して来たら隣近所に挨拶に出向く、道で人に会ったら知らない人にも会釈をする、地域の会合には必ず出席し最後まで残る、消防団員や民生委員などの役は大変でも引き受けるなどである。このような努力の末にコミュニティに迎え入れられると、その帰属感が何とも心地よいと告白する移住者もいるし、また、そのこと自体が農村暮らしの魅力でもあるのだ。

このようにして農村移住に成功した都会人の存在は、その一方で伝統的な農村社会に新鮮なインパクトを与えている。ひたすら大規模化・専業化の途をたどってきた北海道の農業・農村は極めて厳しい状況下に置かれているが、移住者を巻き込んで、この閉塞（へいそく）状況を打破する途があるのではないか、と考える農業者が出始めている。

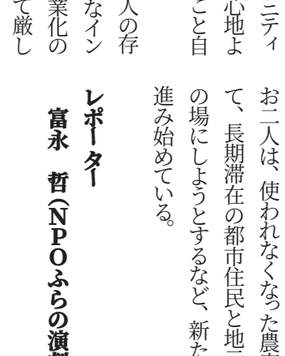
例えば、旭川市内から、同じ旭川市に属していながら人口減少に悩む西神楽地区に、ログハウスを建てて移住した谷川良一さんは、市内で会社員として勤務する傍ら、環境整備、移住者受け入れなどの地域活動に積極的に参加し、今では主導的役割を担っている。その谷川さんに触発されたのが、上村美智子さんと稲葉紀子さんという二人の農家の奥さんだ。静岡県出身の上村さんは、ご自身も今から数十年前に市役所職員だったご主人とともに現在地に新規就農された。現在では四季咲きイチゴを生産、販売する専業農家に成長している。深川市から嫁いで来られた稲葉さんのお宅は、稲作を中心に多くの野菜を栽培している。そんなお二人が谷川さんに勧められて、除雪ステーションの夏季有効活用をはかる農産物の直売会に参加したのが、農村と都市との交流活動に深く関わるきっかけとなった。直売場でのお客さんとのやり取りに強い刺激を受けた二人は、研究会が募集したフランスの農村視察ツアーに参加した。大都市からの移住者を受け入れてよみがえった、フランスの農村の姿を目の当たりにして、大いに啓発され、また自信を深めたお二人は、使われなくなった農家住宅を建て替えて、長期滞在の都市住民と地元農業者との交流の場にしようとするなど、新たな展開に向かって進み始めている。

レポーター
富永　哲（NPOふらの演劇工房副理事長）

炭焼き小屋の見学

真剣かつ楽しい語らい

サロンはカントリーレストランなどを利用



地元の食材を調理